



写真1 整備前の高館地区



写真2 整備後の高館地区



図4 工区を示す平面図

⑤歴史的遺構群を守り育み続ける機運の醸成

お休み処等の無理のない範囲で、維持管理について地域住民との協働を検討する。

幅員の再構成

最大の特徴は幅員構成のデザインである。旧街道の幅員約8mの道路改良であるが、埋設物の維持管理性を重視するほか、自動車交通の速度抑制を促し、また日常の豊かさに貢献できる整備とするために、舗装デザインは全幅の約50%、4mを石畳とした(図3)。現況は車道を中心に据えた片側歩道の歩車分離構造だったが(写真1)、設計計画では歩車道境界の縁石を無くした

フラットな路面とし、かつ地先交通に支障がない2方向2車線の最低限の車線幅に縮小することで、路側帯が両側に確保できるようにした。

車道では中央部と外側で異なる舗装材とすることで車道を狭く見せる視覚効果で、速度抑制や進入抑制を目指した。その結果、石張り舗装範囲の歩行者に留意しながら車が走る利用がなされている(写真2)。

舗装

参道らしい風格を舗装で演出した。沿線のハイライトとなる史跡エリア内を通過する無量光院跡地区では、道路の個性を消す事を重視して工区ごとに工夫を行った。路線の

中間に位置する無量光院跡地区手前で大きく折れ曲がる線形であることから、ドラマティックにスケールや空間が体感できるよう、遺産(歴史公園)内の土色に近い色彩や表情となるように骨材を工夫した舗装とし、供用開始時にひと手間加える設計とした(図4)。

①駅前-中尊寺通り商店街地区、高館-中尊寺前地区

車道中央部は歩行者系道路であることを明らかにするため、目地によりハンプ機能が期待できる石張り舗装とし、路側帯部は柔らかい歩行感と同時に、供用後発生が予想される埋設管の掘り返しによる美観が損なわれることを未然に防ぐ黒アスファルトとした(写真3)。なお

奥性の表現として、無量光院跡地区前後にて舗石サイズを変化させたほか、高館-中尊寺前地区では車道内に張り出す植樹柵(フォルト)を左右交互に設置して一層の譲り合い走行を促し、中尊寺が近づくにつれて徐々に緑深くなるように演出した。

②無量光院跡地区

史跡と一体となった空間演出のため「地」となる舗装として土が想起されるように、有色骨材を用いた耐久性の高い碎石マッシュアップを採用したうえで、均一なエイジング効果が得られるブラスト処理を施すことにより、天然石の持つ柔らかい印象と耐久性を両立させた(写真4)。

道路照明

照度が要求される交差点部では地域らしさのあるオリジナル形状の灯具によるポール式照明を、要所ではゲートサインとして旗台を配置して、メリハリを付けて地域性を表現した。車両衝突などによる破損の可能性のある照明柱には既製品を用いる等、経済性と維持管理性にも配慮した。

道路休憩施設の整備

整備前は、起点の平泉駅を除いて休憩施設がなかったことから、主に沿道の空き区画を利用して適切な間隔に道路休憩施設(小公園)3カ所を整備した。敷地を見渡せる視線の抜け、隣接家屋に配慮した緑や柵、除雪後の雪溜め場も兼ねる広場の配置、トイレを設置する場合は出入口を見せにくくする配置等をポイントに計画した(写真5)。なお、小公園名は自治会ごとに決め、園名板は地元の方が毛筆で書いたものを採用した。



写真3 整備後の駅前地区



写真4 整備後の無量光院跡地区



写真5 館前小公園



写真6 デザイン監理

デザイン監理

本路線の大きな特徴の一つとなっている奥性を色濃く表現している舗装デザインについて、外部に表出される美観確保にとどまらず、デザイン監理業務という枠組みの中で、どのような内容を行ったのかについて紹介する。

実際の現場では、制約条件や安全性・経済性優先の状況等によりデザイン案通りの施工が困難な状況になった場合の対処や、細部の収まりなどに留意が必要である。このため、設計段階で作成した割付けパターン図の他に、曲線部や会合部などに意匠の判断が必要となりうる所を抽出し、割付け要領図を新たに作成して、施工者に細かく意図伝達を行った(写真6)。

評価等

発注者である岩手県県南広域振興局土木部一関土木センターからは、デザインや設計を行った技術者

が継続して係わることで現場の品質が保たれたこと、また複数年にまたがる事業であるため、発注者側担当者の引き継ぎに私共が寄与したこともあり、本業務委託は有効であったと伺っている。加えて、施工者の下請けではなく発注者の委託であったことから、発注者、施工者に対して、設計者の独立性が保たれたことも評価に値すると捉えている。

設計業務において優れたデザインの感性、経験、実績を有する技術者の必要性和、施工時の民間力の活用が有効な手法であることの一端を示せたのではないかと考える。デザインは技術・施工・コストと表裏一体であり、デザインマインドを持った設計者の台頭・輩出により、建設コンサルタントの活躍の場は、より一層高まると確信している。

<参考文献>

- 1) 平井節生、菊池恭二:中尊寺通り景観プロポーザルについて、景観・デザイン研究講演集、No.6、December 2010